
.% LastMoment %.

明日香 %.

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

. % Last Moment % .

【Nコード】

N3172C

【作者名】

明日香 % .

【あらすじ】

青春を最大限に満喫している美悠^{みゆう}。大好きな親友、尊敬する先輩。幸せな毎日を過ごす美悠に最悪の宣告が言い渡された。『貴方の余命は約1年でしょう。』。余命1年を宣告された少女は、最後の瞬間《Last Moment》をどう過ごすのだろうか・・・？

・% P R O L O G U E (前書き)

この小説はフィクションです。

・% P R O L O G U E

私は信じる

この一瞬を . . .

大好きな人達と過ごす
この一瞬を . . .

私は信じている . . .

だから

寂しくなんて
ないんだよ

・ % 第1話 - 幸せな日々 -

朝陽が差し込み

心地よい日差しが降り注ぐ朝。

「んっ朝があゝ」

目覚めスツキリな朝を
迎えていた。

少女、美悠^{みゆう}は
制服に着替えると、
元気よくリビングへ向かった。

リビングでは
母、美咲「みさき」が
フレンチトーストを
焼いていた。
部屋中が甘い香りで
いっぱいになっている。

「おはよう。お母さん」

「あっおはよう、美悠。」

につこりと微笑して
またキッチンへと向かう。

美悠はテーブルに座り、

真ん中に置いてある
写真盾を手にとる。

「おはよう．．．お父さん。」

美悠の父、
兼実 蓮は

今、ハリウッドにも進出した
日本の誇る大人気俳優なのである。

美悠の母、

美咲は蓮の所属している
プロダクションの元社員。

そこで知り合い恋に落ちたと
いうわけである。

現在は専業主婦となり
蓮のいない兼実家を
切り盛りしている。

「ねえお母さんっ。お父さん．．．いつ帰ってくるの?。」

「そうねえ．．．来月には帰ってくるんじゃないかしら?。」

「来月かあ．．．」

蓮は現在アメリカに在住していて
滅多なことでは
家に帰ってはこない。

「ほら早く食べないと．．．」

言いかけた美咲の声を
遮るように玄関のベルが鳴った。

「ほらっ。優美ちゃんが来ちゃったじゃないっ。」

「うそっ！！！」

慌ててパンをくわえて
鞆を持って飛び出した。

後ろでは

「座って食べなさい！！！」

という美咲の声が聞こえたが
そんなことは朝練に

遅れてしまうと

さっさと玄関へと向かった。

「おはよう優美♪」

「おは．．ってまた立ち食いしてっ」

半分呆れながら

美悠を迎えたのは

隣に住んでいる、

つきしま
月島 ゆみ 優美。

名前が

【みゆ】と【ゆみ】と

いうことがきっかけとなり、
仲良くなったのだ。

幼稚園からずっと

一緒なのである。

2人ともバスケ部に所属していて
次期エース候補として有名なのだ。

「ほらっ。さっさと行かないと遅刻するでしょ!!!」

「まっ待ってよ優美!!!」

そう言っ

慌てて優美の後を追う美悠。

兼実美悠の一日は
こっやって始まった。

- 体育館。

朝から体育館には掛け声が響き
練習が行われていた。

「よし!!!! 全員集合!!!!」

「はいっ!!!!」

部長の掛け声で
すぐに集まってくる
バスケ部員。

「今日の練習はここまで!!!! 大会近いんだから気を抜いちゃだめ
だよ!!!! じゃあ解散!!!!」

優美は朝からの激しい練習で汗がびしょびしょだった。しかし、美悠は余裕の表情で元気にスキップしていた。

「なんでそんなに元気なのよ．．．さすが兼実蓮の娘．．．」

「優美！！！！」

慌てて優美の口を塞ぐ美悠。

「はいほゝふよ。はれほひいへはんはいはいはほ。」

訳すと

『大丈夫よ。誰も聞いてなんかいないわよ。』

である。

美悠は手をとると周囲を確認した。皆疲れていて、それどころではなさそうだった。

美悠は父親が【兼実 蓮】だということ隠している。

【兼実 蓮】は結婚していないことになっているからだ。

蓮は発表していいと
言っていたが

美咲が迷惑をかけたくない
と言って公表していないそうだ。
美悠としても

親に振り回されるのは
正直迷惑だったので
ありがたかった。

だからと言って蓮のことが
嫌いなのではない。
いつも会えるのを
楽しみとしているのだ。

「あつ早く戻ろうつ!!」

「うわっHR始まる!!!!」

そう言って2人は慌てて
教室へと走り出した。

・ % 第2話 - 出会い -

- 放課後。

「んーやつと終わった！！！」

美悠は思い切り伸びをして
息をはいた。

「さっ 優美！！！部活行くよ！！！」

「うんっ ♪ . . . ツてああ！！！」

鞆の中を見て唖然となる優美。

「ん？どうした . . . ?」

「これ . . . 」

そう言つて鞆から
一冊のノートを取り出した。
そこにはハッキリと
【月島 優斗】と
書かれていた。

「これ . . . 優斗兄の？」

「うん。お兄ちゃんの . . . 」

「なんで．．優斗兄のノートが優美の鞆に入ってるの？」

「たぶん．．．」

優美が言うには

昨日塾に行くとき

部屋に向かう優斗と

ぶつかって

鞆の中身をぶちまけた

そうだ。

急いで塾に向かっていた

優美は慌てて中身を拾い

飛び出していつてしまった。

その時に優斗のノートを

入れてしまったと

いうわけである。

「これ．．もしかして必要かな！??」

「なら急いで返しに．．．」

そう言って教室に出ようとした

美悠達だったが

同時に放送が鳴った。

『中等部2年3組、月島さん。連絡があるので職員室まできてください。』

「わっ私！??嘘っ!!!!!!」

「．．．。」

ここまでツイてない人も
珍しいなあ．．と

思わず感心してしまった美悠。

「じゃあ仕方ない！！！」

「．．．？」

何を言うのだろうかと思
っていた美悠に
優美はノートを渡して
言った。

「そういうことだからノートよろしくっ！！！！！」

「はっ！？？ちよっちよつと優美！！？」

「じゃっ！！！！！」

有無を言わず
優美はさつさと
教室をあとにした。

「冗談でしょお
う」

美悠と優美の通う学校は
私立【春麗学園】。小中高一貫の進学校。

名門の学校で美悠達は
市内のバスケットチームから
推薦で入学したのだ。
それと、優美の兄
優斗にあこがれ入学した
学校でもある。
美悠達は現在は中学2年生。
優斗は高校2年生。
年が離れていることから
妹のように可愛がって
もらっていた。

「優斗兄は1組だよねっ
」

美悠は優斗のノートを
抱きしめながら
上機嫌で高校校舎へと向かった。

- 高校2年1組。

春麗学園は名門中の名門校。
その中でも特進クラスが
作られている。
人数は20人。
テストで上位20人だった
人達だけが入れるクラス。そして一人の少年は
このクラスで憂鬱な時を
過ごしていた。

帰りのHRが終わると

同時に安斎 藍

《あんざい らん》は
逃走体制に入った。

「あつ 藍。 お前また逃げんの？」

「当たり前だろ。」

「「きゃあああ！！！！藍くうん！！！！」」

「げっ来たああ！！！！」

藍は慌てて前のドアから
逃げようとしたが

女子に塞がれ

既に犬一匹入れる

スペースを失っていた。

「なっなら後ろ！！！！」

そう言つて後ろのドアに
突っ込んだ。

が、

「助かつ・・・わあ！！」

「きゃあっ！！！！」

丁度、優斗を訪ねてきた
美悠とぶつかってしまった。

「ごつごめんね？大丈夫？」

「藍くんっ！！！！逃げないでー！！！！」

「げっ来たああ！！！！」

慌てて鞆を拾い

駆け出した。

そしてそのあとを

女子が全速力で

追い掛けていった。

「なっ何あれ・・・」

美悠は啞然となり

座り込んでいた。

「あれ？美悠？」

「あっ優斗兄！！！！」

「何座ってんの？」

苦笑いをしながら

美悠に手を貸して

立ち上がらせてくれた。

「ありがとうっ！！」

「いえいえ。で、どうした？美悠が高等部に来るなんて珍しいな？」

「あっそうっ！！これ・・・」

美悠はぶつかった時に落としたノートを拾って優斗に渡した。

「これ・・・俺の？」

「うん。」

「ああ・・・優美か。」

「そうだよ。」

「わざわざ、ありがとう。」

そう言って微笑し
美悠の頭を撫でる。

「うん」

美悠も照れ臭そうに
微笑した。

「でも・・・なんで座ってたんだ？」

「えっ・・・あっそうそう！！！」

そこで美悠は

今までのことを話した。

「あー．．．藍だな．．．」

「藍？あの人、藍っていうの？」

「そうそう。」

それから優斗は

藍のことを話しはじめた。

「安斎藍って言ってバスケット部のエースなんだよ。成績も常に5位内に入ってるいわゆる模範少年ってやつだな。」

「模範少年．．．」

「ああ。あとあの顔だろ？女子はほっとかないってわけだ。」

そして一人で頷く。

「だからあんなに女子が．．．」

「そういうわけだ。」

バスケット部なんだ．．．

エースってことは

相当上手いのかなあ．．．

そう思い

藍の去っていった後を

眺めた。

「あつ美悠。お前練習ないの？」

「あつ行かなきゃ！！！！じゃあね優斗兄！！！！」

そう言つて

慌てて駆け出した美悠を

優斗は苦笑まじりで

見送った。

・ % 第3話 - 異変 -

美悠はなんとか練習に間に合い
体を馴らしはじめた。

その隣で優美も
体を伸ばしはじめる。

「お疲れっありがと美悠♪」

「もうっこつちは散々だったんだから。で、優美の用事って何だったの？」

「えっ？あー・・・なんでもない♪」

苦笑いを浮かべ
明後日の方向に
視線を向ける優美。

美悠は長年の感から
何かを悟り
それ以上突っ込まなかった。

「よしっ！！！！練習始めるよっ！！！！」

「はい！！！！」

コートの中へ
向かおうとして
立ち上がる優美。

美悠も立ち上がろうと
膝をついた瞬間。

「．．ツ！！！！あッ．．．」

急に胸に激痛が走り
その場に崩れ落ちてしまった。

「美悠！？？」

優美が慌てて駆け寄る。
他の部員も美悠へと
視線が走る。

「だっ大丈夫。ちょっと胸が痛んだだけっ」
「そう．．．？本当に大丈夫．．．？」

「うんっ」

そう言って
立ち上がる。

「兼実っ大丈夫？」

キャプテンの
にしなが あゆみ
西永 歩が

駆け寄ってきた。

「キャプテンっ！！大丈夫ですっ！！！！」

「大会前なんだし．．無理しちゃダメだよっ」

「はいっ！！！」

そういうと

心配そうに美悠を見て

またコートへと

戻っていった。

．．．今の激痛。

なんだったのかな．．？

その日は

練習に集中できず、

何度もミスをしてしまった。

―校門。

「はあ．．．」

「そんなに落ち込まないのっ！！！」

「だつてえ．．」

肩を落とし俯きながら

歩いていた美悠は

元気のない声をあげた。

その時、後ろから
声が聞こえた。

「君っその髪の毛の長い子……止まって……！」

振り返った美悠は
思わず優美を見た。

優美はストレートで
肩にしかかるくらいの
ショートヘア。

対する美悠は
ロングの髪を
ポニーテールに
結い上げている。

そして
辺りには
猫一匹すらない。

ということは……

「わっ私……！」

「そう君……！」

声の主もそうだと言う。
そして美悠達に追い付き

荒い呼吸を整える。

「えっもしかして・・・安斎先輩ですか!?!?」

「・・・?知ってるの優美?」

「当たり前よ!!!高校バスケット部の期待のエースっ安斎 藍!!!その美貌と頭の良さから高等部の王子様って呼ばれてるのよ!?!!」

目を輝かせて
語りだす優美。

「ふーん。」

しかし

美悠は全く興味なさげに
返事をした。

「へえ・・・そっそうなんだ・・・」

そして

藍も全く知らない事実
に苦笑いを浮かべた。

「えっ・・・待って・・・安斎って・・・ああ!?!?!さっきぶつかっちゃった・・・」

「そうそう。あの安斎だよ。あの時は本当にごめんね。」

「ちょっとちよつと美悠!?!?!あの時って何!?!?!」

「えっ？ああ．．優斗兄にノート渡しにいったときぶつかったんだ。」

優美は目を見開き
啞然となっている。

「優斗．．．？ああ月島かつ！！！！そういえば君．．．顔が似てるもんね！！兄妹かなっ？」

そう言つて優美に
笑顔を向ける。

「はっはい！！！！そうです！！！！」

優美は顔を真つ赤にして
返事をする。

美悠は横目でそれを見ながら
どうしたのかなあ．．．
つと考えていた。

その時、藍の携帯が鳴った。
携帯を取り出し
液晶を見た藍は
一瞬で顔が青ざめた。

「やつやばい。時間がないっ！」

そして美悠を凝視して
がばつと肩を掴んだ。

「君．．．中等部だよねっ！！！」

「はっはい．．．」

「名前は？」

「兼実．．．美悠です。」

「学年とクラスは？」

「2年3組です。」

勢いに圧倒されて
思わず個人情報
ベラベラと話したす美悠。

「わかった！！じゃあ美悠ちゃん。また明日会いに行くからっ！！！」

「はっ？」

「えっ！！！！！」

美悠と優美の
声がハモった。

「まだ．．．お詫びしてないしっ」

「．．．お詫びなんていいです。」

「いや。こっちの気がすまないんだよ。」

「はぁ．．．．．」

「じゃあ明日っ！！！！」

そう言つてまた藍は
走り去つていった。

「よく走る人だなぁ．．．」

思わず呟いた美悠の声に
反応がない。

「優美っ？うわっ！！！」

優美は目をハートにして
顔を真っ赤にしていた。

「藍先輩．．．かっこいい！！！！！」

「．．．．．」

呆れて何も言えず

美悠はさっさと歩きだした。

藍先輩．．．か．．．
変な人．．．

「あー！！！！待つてよ美悠！！！！」

「いーやっ」

そうやって喧嘩しながら
美悠と優美は帰っていった。

・ % 第4話 - 事故 -

「ただいまあ．．．」

「あら美悠。遅かったわねっ！！！」

パタパタと駆けてくる美咲に
苦笑いをうかべリビングに
向かった。

「ほらっお腹すいたでしょ？すぐできるから手を洗ってきなさい！」

「はあい。」

洗面所に向かい
手を洗い出し
ふっと顔をあげる。
自分の顔を見て
顔色がすぐれないのに
気付く。

そういえば．．．あんまり
食欲もないし．．．
体もたるいなあ．．．

どうしたのだからと思ったが
疲れているだけだと思い
あまり気にせず
リビングに向かった。

そして夕飯を食べ終わり
お風呂に入ると
もう12時を過ぎていた。

「はあ．．．疲れたあ．．．」

ベットに寝転がると
急激に眠気が襲ってきた。

そして
いつのまにか
眠ってしまった。

- 深夜4時。

美悠は心地よく
安眠していたが
急激な胸の痛みで
目が覚めた。

「うツ．．．クツ．．．アア．．．」

胸を押さえ
痛みもがく。

「お母．．．さ．．．んっ．．．!!」

必死に美咲を呼ぶが

声が掠れ届かない。

はいつくばりながらも
なんとかドアまでたどり着き
下にある美咲の部屋へと
歩を進める。

そして階段に差し掛かった時
また激痛にみまわれた。

「グ．．ああ．．．」

美悠の肢体が
力を失い崩れおちる。
そして

足に力が入らず
階段を踏み外してしまった。

「っ！！！！ッ．．．きゃあああ！！！！！！」

美悠の体の中を舞う。
そして激しい音を立て
地面へと叩きつけられた。

「美悠．．．．？」

叫び声と激しい音と共に
目を覚ました美咲は
何事かと様子を見に来た。

「美悠？．．．みつ美悠っ！！！！！！」

美悠は地面に頭をうちつけ
気を失っていた。

「美悠っ！！！」

美咲の叫び声が
静かな廊下に響きわたる。
美咲はすぐさま
救急車を呼び
美悠は病院へと
運ばれた。

この時、誰も
これが悲劇の始まりだとは
気付きもしなかった。

・% 第5話 - 絶望へのSTARTLINE -

病院に運ばれ美悠は
すぐさまオペ室に運ばれた。

美咲は顔を青ざめ
オペ室の前の椅子に
座っていた。

「美悠．．．．．」

手を組んで祈るように
目を閉じていた。

「おばさんっ！！！」

その時間き慣れた
優美の声が聞こえた。

「優美ちゃん．．．」

「おばさんっ！！！美悠はっ！？？」

「まだ．．．」

そう言いかけた美咲は
ドアの開く音と共に
口を閉じた。

「美悠っ！！！」

ベットに乗せられた美悠は
ぐったりとしていたが
手を握ると僅かに熱が
感じられた。

「お母様ですね？」

美悠の後ろから
年老いた先生がでてきた。

「先生っ！！美悠は・・・美悠は大丈夫なんですか！！？」

焦る美咲に対し先生は朗らかにわらった。

「なに、心配いりませんよ。軽い脳震盪ですねえ。おそらく軽いめ
まいで足をふみはずしたんでしょうねえ。まあもう大丈夫ですから
」。

なんとも頼りなさげではあったが
美咲と優美はホッとした。

先程よりも顔色のよくなった美悠は
周りの音をよせつけず
静かに夢をみていた。

―病室。

ベットで健やかな寝息をたて
ぐっすりと眠っている隣で
美咲は美悠の手を握っていた。

その隣には優美が
うちらうつらしながら
椅子に座っていた。

「優美ちゃん？」

美咲の声にハツとする優美。

「優美ちゃん．．．もう大丈夫よ。私もついてるし朝練だってある
んでしょ？早く帰って眠らないと体が怠くなっちゃうわ。」

「でっでも．．．．．」

妙な胸騒ぎがした。

このまま

美悠がいなくなりそう。

目の前から消えてしまいそうで。

妙な胸騒ぎは

今も続いている。

「それに大会だって近いでしょ？」

．．．そうだ。

大会が近いのだ。

少しでもうまくならないと
レギュラーメンバーに

選ばれない。

「そう．．．ですね．．．じゃあ私、帰りますね。おばさんも、あまり無理しないでくださいね。」

「ええ。ありがとね優美ちゃん。目が覚めたら美悠にも言って置くわ。」

「はい。それじゃあ失礼します。」

そう言っでドアを開け
静かに病室を出ていった。

．．．きつと．．．眠らない。
そう思っていたけれど
案外ぐっすりと眠ってしまった。

やっぱり
あれは．．．気のせいだっ！！！

そう思い
跳ね起きた優美は
いつもは2人で走る道を
静かに見つめ深呼吸をした。

絶対っ！！！！美悠と
レギュラーになってやるっ！！！！
ふうっと思を吐き

いつもの道を1人で
走りはじめた。

絶望のスタートラインとも
知らずに

・ % 第6話 - 恐怖 -

夢をみた。

暗かった。

暗くて寒くて・・・

何も見えない。

手を伸ばすと

冷たいものに触れた気がした。

恐くて手をひっこめると

その暗闇は笑ったような
気がした。

ここにいちやだめだっ

悟った美悠は

夢中で走り出す。

どこにいけばいいのか

わからないけれど・・・

いくあてなど

ないのだけれど・・・

それでも
ここには
いたくなかった。

無意識に
涙がこぼれる。

―怖い。

「いやっ・・・い・・・嫌だっ!!!!!!!!!!」

「美悠っ!!!!」

美咲の叫び声が聞こえた。
ゆっくり瞼をひらくと
怯えた美咲の顔があった。

「おかあ・・・さ・・・ん？私・・・どうしたの・・・？」

「美悠っ!!!大丈夫!？どこか・・・具合はどうなの・・・？」

「えっえつと・・・」

手を目の前にかざし
ふつてみた。

「うん。手は大丈夫。」

「手じゃなくて頭は!!?」

少し苛立ったような美咲の声を
不思議に思いながら
頭をさわってみた。

後頭部が．．．痛い．．．

どうやらコブができてるそうで
かなり腫れていた。

「後頭部が．．．」

「ああ、それは階段から落ちたときのよ。」

「階段．．．?」

そして気付いた。

私．．．急に胸が苦しくなって．．．
それで足をすべらせて．．．
胸の痛みは．．．気のせいじゃ
なかったの．．．?

胸騒ぎがする。
体に悪寒が走り
怖くなってくる。

「美悠?どうしたの?」

今にも泣きそうな美咲を見て
美悠は口に
だすことができなかった。

そしてやつと吐き出した言葉。

「大丈夫だよ。どっこも痛くないし。こんだけ鍛えてたらこんな怪
我なんてたいしたことないよっ！！！」

そして作り笑いを浮かべ
美咲に微笑みかけた。

「本当に．．本当に大丈夫なのね？」

「もう大丈夫だつてば！！！！お母さんは心配性だよっ。」

「そうね．．．そうよね。」

美咲も僅かに微笑んだ。

「あっ今何時なの？」

「もう10時よ。今日は学校も部活も禁止っ！！明日からまた頑張
りなさいね。」

「えっ！！！！そんなあ．．．」

「そんなあじゃありませんっ。一応病人なんだからねっ。」

「一応ねっ。」

そして2人で顔を合わせ
笑い出す。

美悠も心配は
どこかへといっってしまった。

「じゃあ私は家のことがあるから、ちゃんと寝てるのよ。」

「ほゝい。」

美咲は最後に美悠をじっと見つめ
淡く微笑を浮かべると
静かに病室を出ていった。
美悠はベットに倒れると
優美のことを思った。

今頃・・・授業受けてるんだよね・・・
いゝなあゝ・・・

いつもは大嫌いな授業も
いまでは愛しく感じてしまう。

そんなことを思いながら
美悠は眠ってしまった。

――教室。

優美は美悠が気になり
授業に集中できず

何回も当てられていた。

「月島さん？さつきから落ち着いてないけど・・・どうかしたの？」

「いえ・・・なんでもありません。」

優美は俯いて答えていた。

昼休み。

いつもは美悠と食べるお弁当も
今日はおいしくない気がした。

友達の会話も耳から
通り抜けていく。

はあ・・・

と大きなため息をついた時
ドアがガラツと開いた。

「すみませ〜ん。みゆちゃ・・・あつ兼実さんいますか？」

聞き覚えのある声に

思わず振り向く優美。

そこには藍がいた。

「あつ藍先輩っ！！！」

「えっ？あつ月島の妹さん？」

「あっはい！！月島優美です。」

「優美ちゃん．．優斗に優美かつ。綺麗な名前だね。」

にっこりと笑う藍に

優美は顔が真っ赤になってしまった。

「ところで美悠ちゃんは何？」

「あっ美悠は．．休みなんです。ちょっと体調不慮で．．．」

「そうなんだ．．なんかすれ違っちゃうね。」

藍は苦笑いをして少し考えこんだ。

「仕方がないし．．また来るよ。ありがとね優美ちゃん。」

「あついえ。」

「じゃあね。」

そう言つと

人目を気にしながら
走り去っていった。

やっぱり．．．
かっこいい！！！！

赤面したまま

優美はうつとりしていた。

そして

学校は終わり
部活動時間．．．

優美は少し迷った。

このまま部活を休んで

美悠のお見舞いに行きたい。

でも、そんなことをすれば

美悠は怒るだろうし

第一、レギュラーに

なれなくなるかもしれない。

優美は悩みながらも

結局部活に出ることにした。

大丈夫．．．

美悠だって明日には

ちゃんと来れるんだし。

大丈夫大丈夫．．．

自分を落ち着かせ

優美は体育館へと向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3172c/>

.% LastMoment %.

2011年1月26日13時49分発行